

## 新約聖書 使徒言行録 8章 26節—40節（新共同訳）

<sup>26</sup> さて、主の天使はフィリポに、「ここをたって南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。<sup>27</sup> フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、<sup>28</sup> 帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。<sup>29</sup> すると、「霊」がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ」と言った。<sup>30</sup> フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。<sup>31</sup> 宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。<sup>32</sup> 彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、口を開かない。<sup>33</sup> 卑しめられて、その裁きも行われなかった。だが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」

<sup>34</sup> 宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」<sup>35</sup> そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。<sup>36</sup> 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるのでしょうか。」<sup>38</sup> そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。<sup>39</sup> 彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。<sup>40</sup> フィリポはアゾトに姿を現した。そして、すべての町を巡りながら福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。

## 新約聖書 ヨハネの手紙 一 4章 7節—21節（新共同訳）

<sup>7</sup> 愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。<sup>8</sup> 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。<sup>9</sup> 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。<sup>10</sup> わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。<sup>11</sup> 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。<sup>12</sup> いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。

<sup>13</sup> 神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。<sup>14</sup> わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣

わされたことを見、またそのことを証ししています。<sup>15</sup> イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。<sup>16</sup> わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。

神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。<sup>17</sup> こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。<sup>18</sup> 愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。<sup>19</sup> わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。<sup>20</sup>

「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。

<sup>21</sup> 神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

### 新約聖書 ヨハネによる福音書 15 章 1 節—8 節 (新共同訳)

<sup>1</sup> 「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。<sup>2</sup> わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。<sup>3</sup> わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。<sup>4</sup> わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。<sup>5</sup> わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。<sup>6</sup> わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。<sup>7</sup> あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。<sup>8</sup> あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。

### 説教「まことのぶどうの木」

教会讃美歌	131 番	「聖なる聖なる」	1,2,4 節、
	382 番	「ここは神の」、	1,2,3 節、
	370 番	「しずけき祈りの」	1,2,3 節、
	254 番	「つかれしものに」	1,2,3 節、
	394 番	「主よ終わりまで」	1,2,4 節

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」という言葉は、イエスと弟子との密接な交わりを言い表したものです。

ぶどうは、イスラエル地方で古くから栽培され、旧約の時代から人々にとって

馴染み深い植物でした。木のよしあしを決める尺度は、外観ではなく、よい実を結ぶかどうかによるのです。

ぶどう園経営は非常に手間のかかる仕事であり、良い果樹を維持するためには周到な準備と多大な労力が求められました。このことは、神がその民を守り育てるためにどれだけの労力を費やして下さったか、という神学的な考えを導くものともなりました。

「ぶどう畑」と共に「ぶどうの木」も、旧約聖書において神の民イスラエルの比喩としてしばしば用いられています。民である畑や木を育てる主が神です。

しかし福音書では、ぶどうの木がイエス自身をさす言葉とされ、さらに「まことのぶどうの木」と言われていることに注目してみてください。イエスは「まことのぶどうの木」であり、弟子たちはイエスにつながることによって、豊かな実を結ぶようになると言われます。「まことの」(アレーティノス)とは、実を結ぶ、命を生み出す、命の木、という意味で用いられていると言えます。イエス・キリストは、命のパン、命の水であるように、命の木でもあります。

「わたしはまことのぶどうの木」である。これはイエス・キリストからの呼びかけであり、宣言であり、賜物です。この木につながることによって、私たちは命を得、実を結ぶことができます。

「わたしにつながっていなさい」と言われている者たちは皆、すでにキリストというぶどうの木に繋がれていて、しかも農夫の細やかな手入れを受けていて、実を結ぶように大切にされた枝であります。

このぶどうの木のたとえば、私たちがいつわりの木につながることを捨てて、まことの木を認識し、そこにとどまり続けることを促しているのです。

20 世紀を代表する神学者・牧師であるカール・バルトは、ドイツでヒトラーが独裁体制を確立した年に、「主の御声に従うことが私たちを希望へと駆り立てる」という説教を行いました。ドイツ社会全体がヒトラーとナチスによって戦争やユダヤ人迫害へ向かおうとする時に、権力者の巧みな言葉に従うのではなく、ただ主の御声に従うように、人々に力強く訴えたのです。

「罪とは、個別に何をしたかということではなく、誤ったものについていった結果起こるすべてのこと」だと言った人がいます。純粹でひたむきな気持ちからであっても、誤ったものに従った結果、大きな罪を人は生み出してしまうのです。

「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすれば叶えられる」。

これは、イエスの言葉が私たちのうちにとどまり、イエスの言葉によって私たちの願望が聖（きよ）められた結果と言えましょう。

叶えられるその願いとは、多くの実をつけることに通じる願いです。神にとどまる者は、そこにさらにとどまりたいという望みのもとに、願いを持つのです。そしてその願いの成就是、常に救いのしるしとなります。願う者は、希望のうちに生きます。祈りとは願いであり、願いの成就是救いのしるし・前兆であり、最終的には救いそのものの成就です。したがってイエスの言葉は、確かな願いの成就を約束するのです。

本日の福音書は、ただ字面だけを追うと、劣ったものは排斥されるかのような厳しさを感じるものかもしれません。実を結ばない枝は取り除かれると。ですが聖書には、表面的な意味だけではない、その奥にある目に見えない深く慈愛に満ちたメッセージが込められているのです。聖書が、宗教の枠を越えて人々の心と魂を惹きつける理由は、そこからきているのでしょうか。

「わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」というイエスの言葉は、一見、厳しいものに聞こえるかもしれませんが、そうではありません。これはイエスの、どこまでもあなたとひとつになり、あなたの力になってあげるよ、という深い慈愛と献身からくる言葉なのだと感じます。

あなたを助けてくれるイエスの手は、上からではなく、下から差し伸べられています。あなたの手を握ってくれるイエスの救いの手は、根底・根源から差し伸べられています。

キリストから知られ、キリストを知ったのちは、あなたはもう一人であることはあり得ません。

あなたはいつも根底からキリストの愛に包まれています。

「わたしにつながっていなさい」というイエスの言葉も、支配的というのではなく、どこまでも気前のいい言葉に思えます。

万人に向けられたイエスのこの言葉は、自分自身を完全に神に明け渡さなければ、とても言うことができない言葉ではないでしょうか。

「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている」

あなたに手を差し伸べながら、こう語りかけてくれるキリストの呼びかけにいつも耳を傾け、キリストの方向を見続けながら、祈りと共に日々を歩んでいきましょう。